

2010 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	社会	学科
担当科目	教育社会学(2)-1		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

・仕事内容

- ① 講師控室でのシステムキーの受け取り・返却
- ② 教室のパソコンの起動
- ③ コメント用紙の配布・回収・返却

・気づいたこと

登録者数が多く、コメントを書いてもらう機会も多かったが、それを十分に返却することができなかった。授業を重ねるうちに、学生のほうでも、いつのコメントを書いたのか、いつのコメントは返してもらったのかを忘れていくし、チューターでも把握しきれない。いつも授業後に返却していたのだが、一人ひとり学籍番号を聞いて探し、手渡すのでは、効率が悪い。

また、システムについてだが、チューターは DUET では授業登録さないので資料を見ることができない。資料が必要というわけではないが、授業内容の理解上、見たいときもある。受講学生以外の登録区分を DUET に設けることはできないのだろうか。

・感想

授業の内外において特に仕事があるわけでもなく、正直なところ、私は必要だったのだろうか、役に立っているのだろうかと不安になった。

2 回生のときに受講した授業を 4 回生になって改めて聴くと、自信の成長を感じるころもあり、どこか新鮮でもあり、面白かった。だから、もう少し積極的に授業の感想などを先生に伝えればよかったと反省している。事務的なお手伝いだけでなく、学生の視点を活かすことがチューターの役割ではないかと感じた。

<今後のチューターまたは先生への提案>

・大教室の授業でコメントやレポートを返却する場合、二回目以降は、個人ごとにホッチキスなどでまとめておいたほうが良いと思う。そして前方のテーブルに回生ごとに分けて置いて、取りに来てもらるのが早くて確実。痺れを切らして受け取らずに帰る学生も減るだろう。

・少人数の授業や演習形式なら学生との交流もあるかもしれないが、今回のように登録数も多く、講義形式の授業は、実はあまりチューターの仕事はないのかもしれない。その分、よく分かったとか、ここが分かりにくかったとか、学生として授業を受けた感想を先生に伝えたら良いだろう。

・先生はもう少し仕事をくれても良いと思う。

2010 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	社会	学科
担当科目	教育社会学(2) -1		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

業務の内容は、主に教室の鍵の受取と返却、授業前のパソコンの立ち上げ、コメントカードの配布と回収といったものであった。基本的にはどの業務も問題なくこなせていたと思うが、回収したコメントカードを生徒に返却するという点に関しては最後まで上手くいかなかったように思う。教育社会学は 100 人を超える生徒が受講しており、コメントカードを返却するだけで約 15 分~20 分かかっていた。返却が長引けばその分授業の時間が短くなってしまうので様々な返却方法を考えたが、最後までこれといった良い方法が見つからなかった。コメントカードを利用するのはこの授業に限ったことではないので、良い返却方法を考えるというのは一つの課題となるであろう。

今回チューターをするにあたって、私は次の二つの点に力を入れていた。一つ目は他人との協力である。教育社会学では私の他にもう一人女性のチューターがついていた。彼女とは業務の分担を行い、先に述べたコメントカードの返却方法について相談するなど、様々な場面で協力することができたので、他人との協力という点では良い結果が出たと言えるのではないだろうか。二つ目は授業内容の理解である。目標としては、生徒たちの質問に答えることができるほどに授業内容を理解するというものであった。私は 2 年前にこの授業を受けたのだが、実際に授業を受けてみると学んだことの半分も覚えていないという状況であった。そこで 2 年前のノートを利用して復習と予習を行い授業内容の理解に努めたが、授業についていくのがやっとであった。授業内容の理解という点では、より早くから復習すべきであったという反省が残った。

またチューターになったことで気づかされたことがある。それはチューターという立場が先生側と生徒側の中間にあるということである。例えば、チューターは授業のサポートをするという点では先生側であり、教室が騒がしくなると非常に気にかかるし、逆に授業の理解を助けるという点では生徒側であり、内容がわかりづらい時などは先生に不満をもってしまう。先生と生徒の間に立ち、両者の関係を調整していくこともチューターの重要な業務の一つだということを感じさせられた。

<今後のチューターまたは先生への提案>

先に述べたようにチューターは先生側と生徒側の両方の視点を持っていると考えられるので、チュータリングシステムでの活動報告だけでなく、先生とチューターを交えて話し合う機会をつくることで授業をよりよいものにできるのではないだろうか。